

トーマス・バツクルの歴史觀

德 重 淺 吉

一

學問研究の方法上に於ける歸納法の發見は、或る意味に於て近代文明の播種であつた。即ち十八世紀に於ける諸學問の發達と、十九世紀に於ける文明の進歩とは、實に此れに依つて刺戟せられ啓培せられた科學的研究の結果したものである。然り而して此の一般的機運は歴史研究の上に著しい變化を與へて、比較綜合なる一生面を拓き、此に人類文化の一様性を確認し且つその盛衰興亡に關する省察を新たにして全體としての進歩を信するやうになつた。かくて歴史は從來の物語、教訓、備忘録などの類から脱出して學としての形態をそなへることとなり、先づ始に文明史なる名によつて呼ばれた。蓋し人事現象の後形を觀て人類進化の過程や理法を究めんとするのであつて、ヘルデル、ボルテイル、コンドルセ等の諸大家がその先覺であつた。而して予は更に此の學流の大成者として十九世紀の史學界から三功勞者を挙げ度い。ランケとギゾーとバツクルと是れである。

ランケは人も知る獨逸理想主義哲學の大成者である。従つて彼を一概に文明史家と云ひ去るには

如何の點もあらうが、然し彼が一八二四年に出したローマンス及びゲルマニア諸民族史を始め、羅馬法皇史、普魯西亞史、世界史等の諸名著は何れも實質に於て、ヨーロッパ諸民族的を一丸とし、彼の所謂指導的理念に據つて人類の生活が進化する真相を把握せんとしたものである點から矢張り當時の史潮に乗じた人と云へよう。ギゾーは云はでもしるし、一八二八年九年に有名な歐洲一般文化史、佛蘭西文明史を著し、以て彼の認むる代表的國民文化の精細なる研究をなし、之に依つて人類一般の進化の後形も推知出來ると傲したのであるがバツクルは之に後るゝこと約三十年、一八五七年から六一年までに英蘭文明史二卷を出して彼の謂ふ人類の理知的進歩並に文明の性質に關する意見を發表した。而して彼は此の書を著はすに二十年の長きに亘り、自由なる、時間と潤澤なる資財を用ひて材料を蒐集讀破し以て文明進歩の理論と實際に關する知識の體系を作り上げんことに努めた。而もその範圍は學術、宗教、藝術、倫理、政治、法律、經濟等人事百般の事象に亘りしのみならず、汎く天文、地理、博物等の自然現象にも考察を加へて當時のあらゆる學問を綜合した人間社會の歴史たらしめんことを志したらしい。然り而して由來斯の如きは常人の企て及ばざる所であるが、彼の境遇と熱心と、天才とは稍之を成すに庶幾からしめた。即ち英蘭文明史が猶今日も不朽の名著たるを失はぬ所以である。

彼の中心思想は、文化現象は國民により時代により種々の異りたる色彩があり發達あるかに見ねるけれども實際は全く劃一的のものであつて因果の理法に遵ふこと恰も自然現象がその現はれに於て區々變轉、全く極まりなきが如くなるも精細に觀察すれば整然たる條理を履んでゐると同様に、氣紛れは許されない。従つて歴史家は學術、宗教、藝術等の精神的方面は勿論政治、經濟、風俗、習慣等の社會的方面より、氣候、地味等の風土的方面まで残らず觀察し、而も之を歸納綜合の見地より攻究して人事現象の發生、推移、並に滅亡の上に行はるゝ法則を發見することを任務とする。略言すれば科學的研究の方法によつて文明進歩の原理を定立すべしといふにある。蓋し此の事を完成すれば、後は單に特殊なる國民に之を演繹すれば、その運命を知り得るといふのであつて、彼の言葉を借りれば「人類行動の總和は人類知識の總和によつて左右せられるのであるから此の知識の證據を蒐集し之を逐次的に總括することによつて文明の進歩を調節する諸法則の全體を洞察するのは頗る簡單なことであるやうに思はれる(第五章)」といふのである。

そこで彼は世界史上のすべての文化國民のすべての文化範域に亘つて研究した。故に其の著述は英蘭文明史と題してあつても、實はスコットランド、アイルランド、フランス、ドイツ、スペイン、ロシア、インド、エジプト、メキシコ、合衆國、ブラジル、ペリユー、ニカラガア等に及んだので世界文明史と冠しても敢て差問題ないものである。然しながら彼の豫期した如き精密さを以て此の如

き廣汎なる範圍の研究が出来るものでない。況んや彼に従へば從來「歴史以外の他の廣大なる研究方面の總てに亘つては、既に概括といふものゝ必要が一般に認められ、個々の事實の研究よりも更に一步を進めて此等の事實を支配する法則を發見せんが爲に崇高なる努力が試みられたに反し、今日までのところ歴史家の通常採る道は全く之と異り、甚しきに至つては單に諸般の事實を羅列しさへすれば其の任務は終つたもので、唯時々有益と思はれる様な道德的及び政治的省察を之に加へて此等の史實を活躍せしむれば十分であるとの奇怪な觀念を抱いて居り」從つて「未だ必要な研究資料さへ蒐集されて居ない位それ程自己の企てた大事業に對して無能な人々によつて書かれて來た」ものであつて此の二重の仕事を遂行する爲には、「如何に大なる決心を以て、長年月に亘る努力を試みても恐らく二世紀の短期に於ける人類の最も重要な行動すら理解することは出來ぬであらう」(以上第五章)といふに於てをや。だから彼も亦前にギゾーが佛蘭西國民を以て一般人類を代表するものと見做した故智を學び、その自負した「獨創的な研究企劃を棄てゝ、嫌々ながらも一國民の文明史を書くことに決めた」のである。然しこれでは得た結論の普遍性が少いことになる。例へば外國の侵略や外國文化の渡來に伴ふ變動は、世界といふ廣い見地より云へば彼此相接近せしめたものに過ぎぬが、之を或る一國に付いて云へば動もすれば其國民文化の自然的進歩を攪亂して其考量を困難ならしめる。此の意味に於て彼は英國を選んだのであつて、此國は歐洲諸國中最も長い間政局が安定

し、國民は活動的であり、個人の自由は保障せられ壓制と叛逆が少くて國民的進歩の惑亂せらるゝことが小さく、爲に「人類の福祉を究極的に規定する社會進化の大理想が最も完全に近く行はれてゐる」と考へたからである。

さて以上の如く英蘭文明史研究の動機を討ねて來ると、自らそれが社會進化の法則を知らんとするにあつたことが了解さるゝが、それには彼は如何なる公理や定理を設定してゐたであらうか。是れ蓋し已むなく放棄したとはいへ、彼自らが先人未發と自負してゐた研究上のプランを立てさせたものであつて、聽て彼の歴史哲學を形作るものでなければならぬ。そしてそれは幸にも彼の著述の第一篇第一章第二章第三章に散敍してあるから解り易いやうに――

1、史學研究の方法

2、歴史現象の規律性

3、風土と文化との關係

4、文化發達の意義

と順序に並べてその大體を窺はう。

~~~~~

歴史は元來人類の行動を取扱ふ學問であるが、行動そのものは何等かの動機によつて惹き起され

る。ところが該動機は人心それ自身の法則に隨はざるを得ない。而して心は斷へず外界に刺戟せられ、その干涉を受けて屢々その方向色彩を變らせられる。云ひかへれば人間の行動は餘程外界の影響を受ける。そして外界には正しく因果の理法が行はれてゐることは現在の科學が證明してゐる處である、然らば人間の行動にもかゝる理法隨つて規律性がある筈であるが果してゐるかどうか。

此の疑問に對しては、我々は昔から二つの解釋を持つてゐた。一は人事の諸現象は悉くチャンスのものであるといふのと、他は運命だとするものであつて、それが發展して自由意思論と定命論とに分れた。そして兩者は元來人間の力を過信するか乃至は全く認めないかに基くのであつて一見正反對の立場にあるものゝやうであるが、實は全く同性質のものである。即ち前者は純正哲學者の宣傳であるに對し後者は神學者の主張した處で共に臆斷に過ぎない。今若し前者に従へば、各人は自己が絶對自由の行爲者であることを感じ且つ之を信じてゐるから、如何に微妙な論理を以てしても此の意識を奪ふことは出來ぬ。然るにその感ずることは眞理であるかも知れないが未だ曾て眞理であることが證明された事はない。而已ならず意識してゐるからといふのは當にならない、何となれば元來意識なるものが一つの能力であるとは云へないから。即ち學者中には意識は心の狀態に過ぎないといふ人もあるし、又假りに能力であるとしても、往々にしてその意識が誤謬に陥ることあるは歴史が實際に證明する所である。例へば宗教哲學道德等に於ける人類の信念は或る時代には尊信

せられ或る時代には嘲笑せられてゐるではないか。此れ即ち意識の産物に矛盾を來したのであつてそれは未だ以て眞理とはいへない。次に宿命説は一つの想像を基礎とするのであるが、その想像が眞理であるといふ證據は少しも擧つてゐないから吟味する迄もなく臆斷である。

さすれば我々が從來持つてゐる——別言すれば哲學者並に神學者に教へられてゐる——見解は何れも誤れるものであつて人間の行動に對して決して正しき意味を與へ得ない。これは抑々彼等の研究方法が間違つてゐるのに原づく。由來彼等は人心に關する法則を發見する手段として常に一個人の心を對象とする。彼等の學問全體は單一の心を研究すれば萬人の心に關する法則を捉へることが出來るといふ假説の上に立つてゐるから其處に一つの免れ難き障害が起るのである。障害とは何ぞや、研究者をして心的現象の全體に總括的見解を加へることを不可能ならしむるといふことである。何となれば假令どれ程此種の見解が廣汎であらうとも、それに依つて若しくはその中に見解そのものを形作るどころの心的状態がそれから除外せられざるを得ないが故に、各人々々によつて得らるゝ所の決論に相違を生ずるからである。一例を示すも觀念論者は時間、因果性、本體、人的同一性等に關する觀念は單純にして分析し得ざるものなりと説くに反し、感覺論者は極端に複雑なるものであつて聯想の産物なりとするではないか。

惟うに斯の如きは自然科学の研究と純正哲學の研究との間に於ける根本的差異を認識せしむるも

のである。自然科學に於ては數種の研究方法があるが、何れにしても總て同一結論に達する。そしてそれは何時如何なる處でも眞理である。而して茲に注意すべきは、凡そ純正哲學的方法を以てしては知識の何れの部門に於ても未だ曾て何等の新發見も齎らされたことがないといふ一事である。今日我々の知つてゐるあらゆる事物は諸現象を研究することによつて初めて確め得られたものであり、此等の現象の中から偶發的の障礙物を悉く排除し、後に一際目立つて殘つたものが即ち法則に外ならぬ。而して此事は、これ等の障害を悉く艾除し得る程の數多い觀察によるか、乃至は諸現象をそれぞれ孤立せしめ得るやうな微妙なる實驗によつてのみ達し得られるのである。そこで此等二條件の内何れか一つはごんな歸納科學にも必要であるのに純正哲學は兩者の何れにも依據しない。蓋し何人と雖も一心的現象を孤立せしむることは不可能である。それは如何なる迷妄に陥るにもせよ、何人と雖も外界の事象の影響から自己を全然遮斷することは出來ぬからである。

一體歴史家は云ふ迄もなく多數の心を研究するのである。にも拘らず從來の歴史家は思索上の怠慢の爲か或は性來の無能力の爲にか此の事をようしなかつた。そして此の考——純正哲學的研究の——は歴史事實の取扱にも及んで互に一部分一部分の研究をなすに止り、全く孤立の状態にあつてそれ等を結合して一團となし、以て相互の間の關係を見んとする風の研究は一つもなかつた。他の學者例へば統計學者の如きは既に此點に氣付いて、此の研究方法を適用し、以て精神界の諸現象の



規律性といふ大問題を解決したが歴史家は未だその試みさへもなさない。是れ因より史學の對象たる社會現象が複雑多岐なるにもよらうが、一面にはまさしく歴史家の不明を暴露したものに外ならな。いかゝる愚態に在つて史學を科學と同一水準まで引上げんとするも難い哉。故に彼は謂ふ、歴史家が此際適用すべき法則は人事の長い徑路が吾々の眼前に提示する廣大なる諸現象の全體を詳細に吟味検討することであると。

#### 四

歴史をこんな見地から研究する人には宿命説及び自由意思説の何れも權威がなくて、たゞ因果の理法のみが價值を持つ。即ち人類の行動は其先行的動機によつて決定せられるものであるから、若し我々が其等の先行的動機のすべてを知り、且つ夫等に作用する運動の法則を知悉して居たならば必ずやその直接の結果を豫知し得る筈である。随つて同一事情の下には恒に必ず同一結果が生ずるといふ結論に達する。此れは即ち人間の行動は劃一的なりとの原理を導き出すものではないか。然らば之を推して歴史世界に含まるゝすべての變化に及ぼし、以て諸國民の盛衰興亡をも知り得るとしなければなるまい。

處で人事現象には劃一性が存在するといふ證左があるかと反問されたら如何。彼はいふ。殘念なことには歴史家は未だ之を示して居らぬが、予はこゝに統計學者の業債を假りて提出することが出

來ると。元來法律の精神は犯罪者に對して無辜の民を保護することにあるが故に、歐羅巴諸國の政府が統計の有用なることを認むるや先づ手を下したのは各種犯罪に關する統計であつた。故にその資料は夙くより蒐集せられ、現今は既に莫大なものとなつて居り、之に依つて我々は過去數世代の經驗を全部蓄積したよりも遙に多くの人間の道德性に關する實證を學び得るのである。そして此の犯罪統計には苦心慘憺、其の生涯の全部を献げた篤學の士ケトレがあるから、彼の結論を聞かう。それは犯罪に關する總ての事件に於て、同數の犯罪が絶えず繰返さるゝ状態は頗る規則正しきのみならず、人智を以て豫想し得られぬ様な種類の犯罪に於ても亦然りである。即ち殺人罪の如きは、一見した所全然偶發的なりとしか思はれない事情の下に突發した喧嘩口論の後に敢行さるゝのが常であるが、それすらも此の例に漏れない。否毎年殆ど同數の殺人事件があるのみならず此に使用する兇器すらも殆ど同一の比例を示してゐるといふのである。

凡そ斯の如き事實は人間の行爲を以て殆ど全部個人の特性如何に依屬すると信じて、一般的社會状態如何について省察する所なき人には大なる不可思議事であらうが、我々はもつと驚くべき實例を知る。他にあらず自殺であるが、此れ程個人的特色に基く行爲はあるまじきに、更には又ロンドンほど社會状態の變動の激しき處はあるまじきに、そこでさへ殆ど毎年同數を示してゐる。かくして種々の犯罪統計を調査した結果は「人類の犯罪は個々別々の犯人の罪惡の集積と云はんよりも、

寧ろ此等犯罪人が投げ込まれた社會そのもの、狀態如何の結果であるといふ事になる。

然り而して之は唯犯罪のみに止らないで凡百の人事現象悉くさうであつて、其の一例として毎年  
の婚姻數を見ても、此事は個人の氣分や希望で決定せられずし一層大なる社會的事實によつて決定  
せられる。そしてその調節者は英國に於ける過去一世紀の經驗では單に民衆の平均所得額であつた  
ことが解つたが、今では穀物の價格であらうと云はれてゐる。して見れば人類社會には廣汎な劃一  
性が存してゐるのであつて、此の社會的理法の前には、生の執着も死の恐怖も力がないのであると  
見てよい。

## 五

英蘭文明史第一篇第二章は彼の研究法の總括的應用の結果を記述したものであつて、全體の骨子  
をなす所である。予は彼が此の演繹的敘述をなすに當つて、先づ彼の研究の根本目的たりし「要素  
に還元する」爲に、腦裡に簇積せる史料知識の上に彼の所謂人心及外界に關する「科學的總括法」  
を加へる場合、如何ばかり苦心慘憺たるものありしならんかを懷はざるを得ない。實に彼は此の惡  
戰苦闘を経て始めて「自然の手と歴史の手」とを結合せしめ、其の結果によつて志す所の人心の歴  
史を理解することが出来たと喜んだのである。

抑々個人の性格並に社會の組織に及ぼす自然界の諸作用は四つの要素に分つことが出来る。曰く

氣候、食物、地味及び自然現象の一般的情況これである。然し之等は又二つとすることが出来る。即ち前三者は廣義の風土とも云ふべく、これによつて第一には經濟生活に關係し、若し各々の條件がよければ富の蓄積を招來して其の結果知識階級の存在を可能ならしめ、從つて人智の進歩を促すのであるが、後一者は主として精神生活に關係し殊に未開人の想像力を刺激して迷信を生れしめた。次に此の四要素の内でも氣候と地味とが最も強く影響する。といふのは原始社會に於ける富の蓄積は徹頭徹尾此の二者に左右せられるからであつて、歴史を見ても兩者の何れかゞ非常に有利な狀態にあらざる國にして、自己の努力のみで文明を獲得することが出来た國は一つもない。中にも地味の肥瘠は古代社會に於て最も重要な條件であつたが、それが漸次ヨーロッパ中心の時代に下ると氣候の關係が最も強く働いた。前の場合では生産の多少であり後の場合では人間の性格の如何である。而して眞に有能な文明は天恵よりも人間の力に依存するものなるが故に古代の文明は優良にして恒久的のものではなかつた。

また土地と氣候とは富の生産に關係するのみでなく、同時にその分配にも關係する。幼稚な社會では分配は生産に比例するが進んだ社會では必ずしもさうでない。がとにかく富は力の源泉であるから經濟上の優者は政治上にも優位を占める。そして社會が勞働する者と勞働せぬものとの上下二階級に分れ、最後には資本家、勞働者、企業家と分化して来る。

食料品の關係を見るに熱帶の住民は寒帶のそれよりも小食であるが人口の増加率は大きい。今土地氣候食物の三要素を合せ考へると人口問題に想到する。概して人口は食料の多寡如何よつて變動するのであつて、潤澤なれば増加し缺乏すれば停止するか。減少するか。その人々の増減は又賃銀の如何に影響し、勞賃の如何は富の分配に關係する。例へば勞賃が下れば分配は不公平となり、爲に金利は昂騰し、延いて政治上の權力及び社會的地位に不平等を來す。古代文化の榮えた諸國インド、エジプト、メキシコ、ニカラグア。ペルー等は何れも人口の過多によつて階級制度が甚しく、下層階級への壓迫が殆ど言語に絶してゐた。人々は吠陀の詩文や金字塔の宏壯や、コバン、バレンク、ウクスマル等の建築遺跡を見て燦然たる文化の光彩を放ちしものと嘆美するが、實際は全く廢頽、虛榮、不健全なる社會狀態の紀念物であり、上流階級が民衆の勞力とを浪費して毫も意に介しなかつたことの證據品である。げにや彼等の社會制度は終始專制主義を基礎としたものであつて殘忍酷薄を以てしなければ亦も維持することが出来なかつたのである。

自然界の一般的狀態は人心に影響して其の表現たる信仰、風俗、文學、藝術等にぞれづの色調を與へるのであるが、概して云へば未開民は想像力を刺戟せられ、開化民は理解力を刺戟せられる。そして文明の進歩とは要するに想像と理解との不釣合を矯正して、未開時代には殆ど想像のみに歸してゐる思考を推理に讓るにあるとも云へる。由來自然の力が餘りに強大な處では人間は之に壓倒

せられて弱小の感が強くなり、従つて自然を畏れ想像を逞しうして迷信を生み易いが、自然の力の弱い處では自らの力を信じ従つて理知が發達する。實際古代文明が發達した所は何れも熱帶圈乃至は其附近にあつて、山岳、河川、地震、暴風雨、炎熱、疫癘、猛獸、毒蛇等の威壓が強過ぎた爲に想像力を刺戟せられ、迷信を助長し強烈な宗教的感情が起つたのであるが、其後に榮えた歐羅巴諸國に於ては之と反對である。我々はその代表者としてインドとギリシアをあげ得る。かくして文學に就て云へば印度人程詩作に没頭する國民はない。詩は思想上に於ける彼等の民族的習慣とも云ふべく、文典、法律、歴史、醫學、數學、地理、哲學等まで悉く詩文の形で表現せられた。故に散文は發達せぬが作詩法は進み、其用語たるサンスクリットは何れの歐洲語よりも數が多く、且つ音綴が複雑である。之は又彼等を驅つて徒らに遠い昔の暗黒な時代に憬れて、之を讚美する情緒に耽らしめる。詩人が黄金時代を夢み、神學者が原始的美徳を説くは同一轍の事、印度文學には隨所に眩惑せん計りの功名譚があり、それに出づる王者の壽命は五十萬年と記され、普通人さへも八萬年の年齢を持つ。又彼等の宗教は一に恐怖の感を基調としたものであり、その神々はシーバでもブラーマでもガイシユヌでも嫌惡すべき魔體をして描かれて居り、經典はその怪術を物語るに力めてゐる。然るに希臘人は全く之と對蹠的で、宗教の中に少しも恐怖の感を加へなかつた。其の神々は常に人間と同じ形で表はされ人間と同じ性質を持つてゐた。即ち希臘に於ては我々は人間の神化を見

たのであ。る蓋し印度では自然は恐怖を鼓吹したのに、希臘では確信を與へた。彼では萬事が人間の尊嚴を壓服するにのみ役立ち此では益々高めるに役立つたから。後者に於て始めて自然科學は可能となり、他國にては到底期待することの出来ないやうな大膽さで自然を検討してゐたのである。

## 六

上述の如く文明には種々の要素があつて其の形態を決定するのであるが、然し絶大なやうに見ても自然の力は固定的な、制限せられたものであるので、その眞の源泉は何と言つても人間力就中理論的活動である。だから時によつては自然的要素の諸條件が餘りに揃つて優秀なりし爲に其の威壓が強過ぎ、人間の抵抗力が敗けて、却つて文明の發生する餘地のなかつたブラジルの如きがある。人間力の文明に關はる處凡そ斯の如し。之を歴史に徴するも古代の國富は専ら天恵に依存したものであるが現代のそれは國民の活動に依るではないか。然り現代人は天恵が薄いにしても如何にして之を捕ふべきかを知つてゐるのであつて、彼の歐羅巴文明の進歩の如きは物的勢力が漸次減退するに對して心的勢力が増加して來たことを意味するとも見られる。されば印度型文明にあつては人間を自然に隸屬せしめようとする傾があつたのに反して、こゝでは自然を人間に隸屬せしめようとするの傾があつた。故に眞に印度を了解せんと欲せば先づ外界の研究をなさねばならぬが、英國史佛國史等に於ては國民性の研究を重じなければならぬ。

彼に従へば文明なるものは理知と道德性との二重運動である。故に其の進歩は理知的及び道德的の進歩に外ならぬ。何となれば前者によつて義務を遂行する方法をよく知り後者によつて義務を遂行するの力を増すわけであるから。が此の進歩は人間の先天的能力までには及び得ないから、自ら周圍の事情、例せば子供が育てられる周圍の人々の意見、知識道德性等に依らざるを得ない。故に人類全體を通觀すれば其の理知的及び道德的行動は其時代一般に瀰漫してゐる理知的及び道德的觀念に左右されると言はねばならぬ。然るに道德的眞理は昔より殆ど固定してゐるが理知的眞理は代々變つて行く。かくて文明は時代々々で變ると言へばそれは餘程多分に理知的要素によつて規定せられて規定せられて行くのであつて、此の意味に於て文明の進歩は主として理知的發達を意味するものと思はねばならぬ。

今之を國民の活動に引合せれば、現時に於ける國民文明の進歩は主として國民の理知的實力の増進といふことになるのであるが、抑々國民社會に於ける理知的要素はまづ第三階級即ち知識社會に現はれる。そして歴史を按ずるに此の階級が微ながらも初て獨立的な活動に出でたのは第十四、五世紀の頃であり、次の世紀には、明かなる形態をとつて宗教上の暴政に現はれ第十七世紀に至つては政府者の稅政に對する數次の革命を誘起し歐羅巴諸國中に其影響を與へた。そして十八九世紀には彌々其力を伸張して公私各方面の生活にも及ぼし、或は立法者を教育し或は諸君主を統制し或は



民衆の教育にも及んで輿論の優越性を確立し、以て立憲君主は勿論最も專制的と認められた輩をも之に聽從せしむに至り、經生活の發展と相俟つて好戰的思想を減退せしめた。今日猶ロシアが好戰的であるのは、未だ國民の理知的教養が足らない爲に、知識階級の實勢力を缺ぎ軍人社會が最高權を揮ふからである。そして此の種の幼稚なる社會には未だ中産階級が存立しないから、此の階級から芽を出す思慮深い平和的な風尚は生れ出ないのである。而して我が英蘭は之と反對の社會的階梯に進んでゐるのである。

## 七

以上バックルの歴史に對する考の輪廓を略敘し終つたから少しく私見を述べて本稿を結ばう。第一に彼は歴史研究の目的は人類進化の理法を發見するにありとなし、其爲に資料を廣く人事現象一般に取り、自然科學的研究方法を用ひよと云ふのであつて、其の根本精神に於ては從來の觀念論的史學に對する大革命の宣言書と見られる。そして或は歴史現象の實體たる人間の行動には自然界の諸事情が多分に影響するから之を重視せよと主張し、或は個人の心理と社會の心理とは同一ではないから萬人の心理を研究し、統計的手段を用ひよと云ふあたり、假令十九世紀前半の科學全盛の時に人となり人類地理學、社會學、心理學、統計學等新興科學の主張に刺戟された所ありとはいへ、こんな自由な深刻に歴史現象そのものゝ本質を考察したのはまこと驚嘆に値する。殊に彼は外界の

影響を重視するが而も猶歴史的事件の進行に當つては外界の作用よりも人間の力、就中理知の力が最も強く作用すると論するのであつて、その細叙し精究した自然的諸要素の配合論の如きはたゞそれを科學的に整理し組織化して考へたといふに過ぎぬ。故にバルトがなした如く之を以て直に彼の史觀を人類地理學的歴史觀と名けるのは誤解を招き易い。彼の眞面目は寧ろあらゆる歴史的要素を列舉し之を正しき、重要さに於て統整する綜合的艾明史觀とも名づくべき所にある。従つて又彼を唯物史觀論者である如く見做すのも當らない。畢竟彼は當時の歴史家が哲學的研究法を墨守し、且部分的考察を以て人間社會變遷の真相を究め得るかに自任し、従つて史學の進運が自然科學のそれに比して甚しく後れてゐるのを慨したのであり「唯數年間の内に數卷の書物を讀めば忽に一廉の歴史家となり」或る者は經濟學に關して全く無知であるかと思へば或る者は法律を少しも知らず、又或る者は宗教を解せず、殊に大多數のものが自然科學の何たるかを知らない爲に其研究は部分的孤立的なるに止り却つて人類知識の進歩の上に危險な結果を齎してゐるから廣き見地に立ち、最も進歩した眞理探究の方法を用ひて「諸國民の性格並に其の運命を支配する原則」を發見せんとしたのである。だからそれは社會學的歴史觀とも云へぬことではないので、かくして到達した所が、人類の文化に及ぼす、若しくは國民性に差異あらしめて其の文化に特殊相を持たしむる原因として四要素を採し出したのであつた。即ち此の四者の結合狀態如何によつて國民性が違ひ、文化の色彩が違ふか

ら此の研究が大事だとしたのであつて、複雑多様な自然的影響をこの四要素に還元した苦心は察してやらねばならぬ。

彼はその史觀を確立する爲に非常な廣汎な研究をなした。けれども所謂原理を立て、之を證明せん爲には尠からずドグマに陷つてゐる。是れ一には當時の學問の進歩が今日から見ても未だ至らなかつた點にもよらうが、一には餘りに原則々々といつて概括癡綜合癡に陷つた所もある。又一には彼の隱遁的生活そのものが見解を狭くして、半面的な所論を敢てせしむるに至つたことも否むわけには行くまい。また人事現象は複雑であつて自然現象と一樣に視ることは出来ない。因果の理法は信じてても最後まで偶然と呼ぶ外なきものは除き得ない。何となれば人間の肉體及び精神に關しては未だすべての事がわかり盡されたとは云へぬし、又永久にそんな時は來まいから。

彼は又餘りに理知を重視して情意の力を輕視した。國民性を論ずるにも科學的進歩のみを測つて優劣を定めんとした。學問の研究法にしても内省的思辨を否定して極力哲學者を排撃してゐるが、かゝる純粹なる客觀の可能を否定することは、やがて彼自身の研究法をも否定するものなることに氣付かない。蓋し實驗觀察をなす主體は即ち自己の思考推理判斷であるから。要するに此も科學萬能論の餘弊である。

然し何人と雖も彼を讀んでその深さと廣さと獨創的なとに敬服せぬ人はあるまい。是れ即ち彼

の綿密にして熱情ある研究に基くのであつて、その自信ある鋭き筆致は之に負う所が多い。然り彼は情熱の人であつた。その半生を倫敦郊外の簿書堆理に過した後、癩病しげき小亞細亞に史料蒐集の旅を行つて客死した。實に一八六二年五月二十九日である。すなばち彼の要求した冷靜は眞理探究の熱火の上に瀰脱されたものであり、その隱遁的生活は（固より彼の性格によるものではあるが）人類文化の爲に貢獻せんとする高潔なる理想によつて合法化されたものであつた。さればこそ彼はその嫌な僧徒を罵倒するに世俗より全く離れて人類の利害關係に無關心であるからと言つたのである。

思へば彼が四十一年の生涯は殆ど英蘭文明史を創造する爲に存へたものゝやうであつた。そしてそれは確かに彼をして不朽なるものに値せしむる。かくて夙に彼が第一巻を出した當座に於て此書は從來全く沈黙の一青年を上げて一躍ギゾーやマコーレイ等の大家と伍せしめた。時正に我が安政四年である。即ちその影響は世界各國に傳播し、彼の死後一年ならざるにドレイバーの歐洲文明史は出た。其後幾何ならずして泰西の學術を輸入した我國に於ても政治、軍事、醫學等の外に先づ紹介されたのは彼の文明論であり、以て明六雜誌にも箕作麟祥氏によつて、その一部を載せらるゝに至つた。にも拘らず未だに彼の眞の眞價は認められてゐないではあるまいか。此に於て拙稿も存在を許されよう。